札幌支部活動報告

１．活動方針

「研究主題の具現化を目指した研究推進と人材育成を目指したチャレンジ授業の実施」
～新学習指導要領の内容を踏まえて～

第53回北海道学校体育研究大会の成果と課題を踏まえ、平成30年度に新研究主題を設定した。そして、その具現化を目指し、各ブロック授業を行うことができた。特に札体研研究大会では、５・６ブロックが担当し、課題はあるものの提案性のある授業を公開することができた。

さらに、例年行われている研修会２つ（夏季実技研修・冬季学習会）に加え、令和元年度も出前研修を行った。講師は研究部員が務め、参加された先生方の笑顔が見られる研修会となった。特に今年度は、札幌市の学校に「タグラグビー」の教具が配布されたので、重点的に研修を行った。

研究推進では、プロデュース授業の在り方を大幅に変更し、多くの人が授業をすることができるチャレンジ授業を実施し、大きな成果を上げることができた。次年度は、授業公開の際に簡易単元構造図を作成し、一般化を図るようにしていく。また、全道大会に向けて研究主題の具現化を目指して、全市大会やブロック授業に取り組んでいきたい。

２．業務内容・分担

（１）研究活動の推進

～小１－４、小５・６、中学校各ブロックの研究内容面を推進する。

（２）実技研修会

・夏季実技研修会では若手の育成を図り、さらに連盟会員以外にも広く呼びかけていく。

（３）冬季学習会

・実践発表や研究交流を通して、会員の学習の場とする。

（４）出前研修

・研究部員が体育授業のワンポイントの説明をする。今年度は新琴似北・平岸・手稲西小学校で実施した。

（５）チャレンジ授業の運営

・未来に向けた人材育成、より多くの会員が授業をできる機会を確保するために少人数でグループを多数編成し、チャレンジ授業を行っていく。

（６）北海道学校体育研究連盟との連携

・全道研究担当者研修会への出席を通して、各支部との交流、情報の収集に努める。

今年度からスタートしたチャレンジ授業は、再来年度に行われる全道大会、2025年度に行われる全国大会に向けて、授業者を育成すると共に研究団体に所属する全会員が、授業をする機会を確保するという目的を達成することができた。冬季学習会において、成果と課題を明確にして、次年度につなげていきたい。

３．活動について

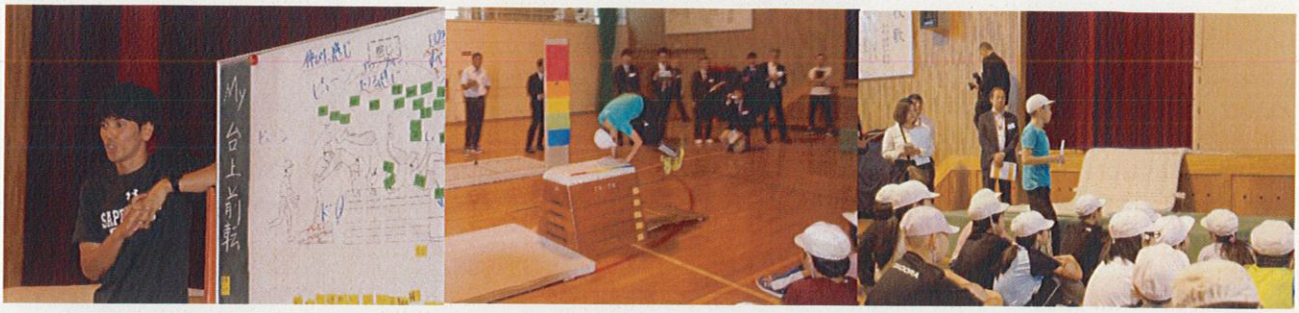
（１）「第２９回　札幌市学校体育研究連盟　研究大会～伏見小学校」について

【公開授業】　　授業者　秋元　来舞　教諭

「跳び箱運動」

助言者…中島　寿宏様（北海道教育大学准教授）

助言者…岩田　悟様　（札幌市教育委員会指導主事）



視点１　主体的・協働的な姿を生む教材化と学習過程

○技能ポイントに応じた様々な場が用意されていたのがよかった。
○学びの道筋を子どもたちが創り出すことに重点を置いた学習過程であった。子どもが獲得した「感じ」をどの場面でも味わえるように授業構築しているのがよかった。
●前時との違いがなかったので、「もっと好きな」とか「新たな」感じを味わうためには、どうしたらいいのか等という展開にするとよかった。
●今日の目標と活動のズレがあった。「感じ」をベースに進めるのはよいが、楽しさや喜び(技を身に付けた・より困難な技に挑戦できた・より雄大で美しくできた等)を大切に進めた方がよかった。
●中学での体育授業を見据えて、５年生の段階で求められる技能レベルを設定する必要がある。

視点２　主体的・対話的な姿を生む関わり

○腰メーターを虹色にしていたことで、腰の高さを視覚的に捉えることができていた。
○子ども同士が関われる腰メーターや色を付けた踏み切り板などが有効であった。
●試技を行う子を誰にするかを考えた方がよい。また、自己の能力に適した場所を選択することができていなかった。
●課題把握時に、試技の子に対して「どんな感じを味わいたくてやっているの。」「どの技能ポイントを意識していたと思う。」などと問いかけたり、子どもたちが、どういう感じを追い求めているのかを表出させたりした上で、身に付ける技能を意識させたかった。
●変容を見取るのが難しかった。「感じ」を追い求める中でも「やった!」「できた！」を味わわせたい。

視点３　深い学びを生む評価

○「どうしたら○○な感じを味わえたの。」「どんな感じだったの。」などと先生がいろいろな場で、 たくさんの子どもたちに関わっていたのがよかった。
●振り返りでは、初めて台上前転ができた子へ「できてどんな『感じ』が味わえたの。」と問うことで、「技能」と「感じ」を結び付けることができた。
●子どもたちに関わることに注力し過ぎて、運動に浸れない子に関わることができなかった。

４．成果と今後の課題

昨年度に引き続き、学習者の視点に立って授業構築をしてきた。「主体的な学び」と「技能・知識の獲得」の保証を両立していくことが今後の課題となる。課題解決のためには、児童の実態に応じた授業構築を行うことと「深い学び」の具体的なイメージをもち、共有化を図ることが必須である。そうすることで、教師は、子どもたちの様々な学びの姿に応じた手だてを講じることができる。